

Title	明治期往来物の国語学的研究
Author(s)	小椋, 秀樹
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42213
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	小 椋 秀 樹
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 1 5 9 0 8 号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科国文学専攻
学位論文名	明治期往来物の国語学的研究
論文審査委員	(主査) 教授 前田 富祺 (副査) 教授 蜂矢 真郷 教授 川村 邦光

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、明治期往来物がどのような資料的性格を持つのかについて、体裁、構成などの書誌的事項を参照しつつ、国語学的に考究したものである。

本論文は、序章、第1章「明治期往来物の研究史」、第2章「調査資料」、第3章「書簡文研究資料としての明治期往来物」、第4章「資料研究」、終章、および「明治期往来物調査目録」からなる。

序章では、書簡文研究資料として往来物をとりあげる理由、本論文の目的、とりあげる往来物の種類など、考察を進めるための前提となる事柄を述べる。

第1章では、明治期往来物をとりあげた先行研究を概観する。国語学的な研究として、橘豊と土屋信一の研究、教育史的な研究として、母利司朗と天野晴子の研究、明治期往来物を考察の対象としたものではないが、小学読本、国定読本を資料として、明治期における候文体書簡文の文体の変遷について明らかにした木坂基の研究をとりあげている。

第2章では、本論文で調査した明治期往来物を一覧するとともに、その体裁と構成について述べる。今回調査した男子用往来物50点、女子用往来物25点を一覧し、装丁と書体、頭書の有無と内容などについて検討する。

第3章では、候文体書簡文における定型表現をキーワードとしてとりあげ、それら定型表現の明治期往来物における使用実態を明らかにするとともに、その結果をもとに、各往来物の資料的な性格について見通しを示す。Ⅰでは、明治期男子用往来物における頭語「拝啓」「謹啓」「拝復」、結語「敬具」「謹言」の使用実態を明らかにするとともに、相手への依頼を表す「～べく候」の使用状況を調べ、その変遷を明らかにしている。Ⅱ「書簡文研究資料としての明治期女子用往来物」では、女子の候文体書簡文における文末の定型表現「参らせ候」をとりあげ、資料的な性格を考察している。

第4章では、これまで調べた、往来物の中で特に注目されるものとして、男子用往来物では荻田長三『普通用文章』（明治5）、女子用往来物では下田歌子『女子書翰文』（明治31）をとりあげ、資料研究を行っている。最初に『普通用文章』の左ルビに用いられた漢語の性格について、江戸後期口語資料の漢語との比較を通して考察する。次に、『女子書翰文』の体裁と構成について述べるとともに、著者下田歌子の書簡文についての意識を『女子書翰文』の記述から探っている。また、『女子書翰文』で女子の候文体書簡文の定型的な文末表現「参らせ候」があまり用いられないことの原因についての考察を加えている。

最後に、終章において、今後の課題などについて述べ、本論文の締めくくりとする。

(400字詰原稿用紙換算約550枚)

論文審査の結果の要旨

明治期往来物は刊行された数の多いこともあって研究が遅れている。特に教育史的研究に比べて国語学的な研究は少なく、橘豊、土屋信一、木坂基等の研究があるくらいである。その点からすると、本論文は男子用往来物50点、女子用往来物25点を選び、一つ一つの性格を検討するとともに、時代的な変遷を考察したものと高く評価される。特に、男子用往来物の頭語と結語を、「べく候」などについて、女子用往来物の「参らせ候」などについて、定型表現の使用実態およびその変遷を明らかにしたことは、明治期往来物の候文体の変遷を窺う上で重要である。また、萩田長三『普通用文章』、下田歌子『女子書簡文』をとりあげたことは、往来物の特色の一端を明らかにしたものと興味深い。

もちろん、本論文は、数多くある往来物のうちから資料を限定して、しかも計量的な研究を中心としてまとめたものであるところに限界がある。また、往来物の国語学的な特色のうち、さらに検討すべきところもあるかと思われる。実際の書簡文と対照することによって、往来物の位置付けをすることも必要であろう。当時の出版事情を考えたり、社会生活の中での書簡の位置、社会的な情勢と書簡の内容との関わりなどを考えることも期待される。

しかし、本論文によって、明治期往来物の全体について国語学的な研究の見通しがついたことは大きな成果である。本論文は今後の研究の基盤を作ったものとして高く評価されるのである。今後の課題として述べられたところを補って、さらに大成されることが期待される。

なお、2001年2月15日に本論文の公開の口頭諮問を行い、最終試験を終えた。よって、本研究科委員会は本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。